

TCVV 白書

特別記事:: TCVV が見てきた 20 年

連載記事:: 声優システム論-アイドル声優の構造的問題-

The TCVV Whitepaper 2017 NO. 19



声優は Visual に出るな！宣言 Ver1.11

声優は Visual に出るな会議 決議第 00000 号

声優は映画俳優・舞台俳優に比べ声だけで勝負をするという過酷な生業である。映画・舞台俳優は身振り手振りが付加されるので視覚に訴えることが効く。が、声優はそうは行かない。だからこそ高度な演技力が必要とされるのではないだろうか。現在、第四次声優ブームと言われているそうだが、何か違和感を感じずにはいられない。最近の「声優」と呼ばれる人々は Visual、その他のメディアに頼りすぎ・出過ぎではないだろうか？今やマーケティングでメディアを十分に活用すれば、そこら辺のお姉ちゃんでさえも CD をあつという間に売ってしまう。この状況を「沈黙のミリオンセラー」*1とは良く言ったものである。「声優」自体が今やメディア戦略によって商品になってしまったと思う。この戦略は聴衆を気がつかない間に購買者に変えてしまう巧みなシステムだと考える。しかし、このシステムは本来の価値。つまり「声のプロフェッショナル」としての声優を正当に評価していないものであると言える。

舞台俳優の中には決して Visual に耐えられる人ばかりではない。が、そのような人が舞台に立てるのは、人を引き付ける演技力を持っているためであると考え。一方、声優の質は低下している。これは最近のアニメーションは高度な演技力を必要としないものが多くなっているからといえよう。そうなれば声優の質が低下するのは至極当然のことである。*2従って、高度な演技を必要とする作品では声優の能力の限界が露呈してしまう。例えば、劇場版新世紀エヴァンゲリオン最後の最後はアスカのほんの一言で終わる。*3しかし、この台詞は始めに用意してあったものとは違うものであったようだ。本来は「あんたばか？」であったようだった。が、声優の力量不足のため、結局「気持ち悪い。」へと変更を余儀なくされた。完全に声優が役に負けてしまっていたのである。結果、作品は中途半端に仕上がってしまい損害を被ったのは我々聴衆者である。

声優が新境地を求めるのもいい。しかし、声優も役者であるのだからまず足場を固めてから進出するのが筋と考える。我々は、健全な日本アニメ・マンガの質を守るため、ここに「声優は Visual に出るな！」を宣言する。

*1 誰もが知っている訳でもないのに 100 万枚以上売ったレコード・CD のこと。一昔前は 100 万枚といたら大部分の人がその曲を知っていた。

*2 劇場版 Evangelion のパンフレット（春、夏ともに）にて清川元夢氏はプロ意識なき声優への批判とも解釈できる発言をしている。これは非常に勇気ある発言と言える。（普通はこういう事は映画のパンフでは言わないであろう。）

*3 実は Evangelion はヲタク（庵野氏）によるヲタク批判であったことはあまり報じられていない。ヲタクの皆様はそのメッセージを受け取れなかったとのこと。（レイとシンジが列車に乗っていて会話をするあのシーンが批判部分とされている）

目次

巻頭言	4
1 第 19 回 TCVV 短期アニメ観測調査	6
1.1 TCVV 短観概要	6
1.2 調査期間	6
1.3 集計	7
1.4 傾向分析	8
1.5 際立つ状況	9
1.6 気になる動き	9
1.7 定点観測	9
2 TCVV が見てきた 20 年	11
3 声優システム論 11(声優を取り巻く状況)	16
4 Chairman's free talk SPECIAL -議長放談-	20
編集後記	22

設立 20 周年にあたって

当サークル「声優は Visual に出るな!会議 (The Council of ‘Voice actor should not appear in Visual’)」は 2017 年で設立 20 年を迎えた。

「何で演技が大して巧くもないのに声優が顔を出して、大して上手くも無い歌をうたったり、写真集を出したりするんだ。」そんな違和感を抱き 1997 年の暑い夏、清川元夢氏の言葉を信条に未熟な役者たちに精進を求めたことを目的として設立した。

当時は第 4 次声優ブームの黎明期であり声優界は混迷を極めていた。好きな原作がアニメ化されるとのことで嬉しかったが声優の演技が酷くガッカリした。その一方で本業そっちのけで企画モノの CD を出したり、アーティストという名前の歌手をやってみたり、ラジオで DJ やったりとアイドル気どり。まさにやりたい放題である。ヘタレな演技しか出来無いのに露出だけは一人前。そんな似非声優どもが雑誌、テレビを賑わせると不快感でいっぱいだった。作品が残念なことになった原因を作った似非声優どもに腹が立った。「お前らふざけてるのか!」と。

我々は彼等を声優とは呼びたくなくアニメタレント、略してアニタレと称して区別してきた。アニタレによりまともな演技をする人々の立場というのが脅かされている。「このままでは、日本が誇る文化を駄目にしてしまう。」「ヘタレ演技によって不良品な作品が粗製乱造されるのを放ってはいけない。」と。TCVV は日本アニメを保護するために諫言役として様々な提言や問題を呈じてきた。それがゴマメの歯軋りと言われようが。

それから 20 年経った現在、とりまく環境は当時とは大きく変化した。不快になるような演技をする者は大幅に減ったと思う。だがしかし、今度は別の問題が発生した。声優になりたいという希望者が増え、声優のサイクルが余りにも早過ぎてベテランと呼ばれる人々が育ちにくい環境にあると考える。20 年前では考えられないような乱立されたユニット群。それも容姿を基準としたものだ。

さらに昨年、ユニット化の本家本元の秋元康が参戦を表明。来年には本格的にアニメ化もする。この 1 年間は情報を小出しにしながら何やら画策をしているのが見えるので我々としては戦々恐々としている。

我々の基本理念は一貫して変っていない。ただ単に良い演技を見たいだけだ。性格も容姿もどうでも良い。ブラックボックスでたくさんだ。我々は視聴者として結果だけ貰えればよい。そのためにはサイクルの短い今のあり方は非常に危険だと思う。

ユニットという売り方は経営戦略的には合理的な面がある一方、様々な問題もかかえている。過去、似非声優の粗製濫造を心配してきたが、今やユニットを中心とした売り方によってサイクルが短くなり声優の使い捨てが加速している。

ベテラン不在と言われて久しいが声優という職業に対して今後の行く末が危ぶまれる。今回は 20 周年ということもあり本誌は毒は多めに配合した。喧嘩上等で全方向を敵に回す覚悟で執筆したので覚悟して読んで頂きたい。

The council of 'Voice actors should not appear in Visual'

1 第 19 回 TCVV 短期アニメタレ観測調査

TCVV 情報管理部 調査課 短観担当

1.1 TCVV 短観概要

経済指標を示す「日銀短観（日本銀行短期経済観測調査）」のようにある期間に区切りアニメタレントの出演数を調査することにより現状の動向を分析する。

データは「しょぼいカレンダー^{*4}」から TCVV の算出基準^{*5}により機械的に抽出したものである。

集計方法は新規出演数を四半期毎に集計し合算した後、4 で除することで四半期当たりの新規出演数の平均値を算出する。この値を「短期的な活性度（単純活性度）」と定義する。

ただし、人間は忘却をする性質があるので『単純活性度』だけでは感覚に合致しないと考える。最近の出演した方がより印象が深い。そこで人間の感覚を取り入れるため過去を割り引いて考えた『感覚活性度』も同時に算出する。

具体的な算出方法は 4Q 前は出演数に 0.25 を、同様に 3Q 前は 0.5、2Q 前は 0.75 を乗ずることで重み付けし人間の感覚により近い活性度を算出する。

活性度が 1.00 以上ということはクォータ毎に平均して新規 1 本出ていることになりコンスタントに新規出演していると言える。言い換えれば『常に新しい状態』である。

順位に関しては感覚活性度を優先とし、感覚活性度が同値の場合は単純活性度で比較した。また調査結果については誌面を圧迫するため男女とも上位 20 名までの掲載とした。

（標本数 女性 253 名）また、前回調査（2013 年冬）から 90 人弱追加した。

1.2 調査期間

西暦 2017 年 1 月～2017 年 12 月

本調査は十分な調査をしていますが内容を保証するものではありません。

^{*4} <http://cal.syoboi.jp/>

^{*5} 無料放送の TVA レギュラ出演のみで単発出演は除く

1.3 集計

1.3.1 女性編

2017年TCVV短期アタレ観測調査

順位	氏名	2017/4Q	2017/3Q	2017/2Q	2017/1Q	単純活性度	感覚活性度
1	釘宮理恵	6	3	6	3	4.50	3.00
2	日笠陽子	2	6	6	5	4.75	2.69
3	能登麻美子	5	3	6	1	3.75	2.63
4	M・A・O	4	4	5	2	3.75	2.50
5	早見沙織	4	4	3	5	4.00	2.44
6	水瀬いのり	4	2	6	4	4.00	2.38
6	花澤香菜	4	5	1	5	3.75	2.38
8	茅野愛衣	4	4	2	5	3.75	2.31
9	佐倉綾音	3	4	3	4	3.50	2.13
10	上坂すみれ	4	4	1	3	3.00	2.06
11	小松未可子	4	1	4	5	3.50	2.00
12	喜多村英里	3	4	2	3	3.00	1.94
12	内田真礼	4	3	2	2	7.75	1.94
12	加隈亜衣	5	2	2	1	3.50	2.31
15	悠木碧	3	4	1	4	3.00	1.88
15	小倉唯	3	3	3	3	3.00	1.88
15	伊藤静	1	6	4	0	2.75	1.88
18	沢城みゆき	1	5	4	2	3.00	1.81
19	佐藤利奈	3	3	3	1	2.50	1.75
20	小林ゆう	3	2	3	3	2.75	1.69
21	種崎敦美	5	2	0	0	1.75	1.63
22	井上喜久子	2	2	5	1	2.50	1.56
22	赤崎千夏	3	2	3	1	2.25	1.56
22	金元寿子	3	3	2	0	2.00	1.56
22	高森奈津美	4	2	1	1	2.00	1.56

2013年 TCVV 短期アニメ観測調査

順位	氏名	2013/1Q	2013/2Q	2013/3Q	2013/4Q	単純活性度	感覚活性度
1	花澤香菜	3	3	6	9	5.25	3.94
2	茅野愛衣	7	4	7	6	6.00	3.75
3	斎藤千和	2	2	5	6	3.75	2.81
4	阿澄佳奈	3	5	4	4	4.00	2.56
5	日笠陽子	4	8	5	1	4.50	2.44
6	高垣彩陽	1	3	4	5	3.25	2.44
7	堀江由衣	1	4	3	5	3.25	2.38
8	内山夕実	1	6	4	3	3.50	2.31
9	佐藤利奈	1	3	6	3	3.25	2.31
10	沢城みゆき	2	6	6	1	3.75	2.25
11	釘宮理恵	2	6	2	4	3.50	2.25
12	戸松遥	2	4	2	5	3.25	2.25
13	井口裕香	4	2	6	2	3.50	2.13
13	喜多村英里	4	3	4	3	3.50	2.13
15	種田梨沙	1	2	4	4	2.75	2.06
16	三森すずこ	4	1	2	5	3.00	2.00
16	佐倉綾音	2	2	6	2	3.00	2.00
18	加藤英美里	2	4	3	3	3.00	1.94
19	日高里菜	3	3	3	3	3.00	1.88
20	能登麻美子	1	1	5	3	2.50	1.88

1.4 傾向分析

休刊していた4年前と比較すると大変面白い結果が見えて来た。

新人がうごめく中で、中堅どころの釘宮、能登が1、3位とひととき目立っている。替えが効かない独特な声を持つ釘宮、能登が非常に強い様子が窺える。女性2位の日笠陽子に関しては何もかもがおかしい。通常であれば結婚すると出演数が減る。が、逆に増えている。

目を引くのが前回まで無名だったM・A・Oが4位、また100位以下だった水瀬いのりが8位。大躍進としか言いようがない。

水瀬はキングレコードの威光よりもごちうさ以降人気が急激に上昇していることが原因と考える。

1位常連だった花澤香菜が大きく後退したが依然として高位。前回2位の茅野愛衣も後退しているが、それでも高位にいる。さらに能登麻美子も高位と。大沢事務所が鉄壁の守りを固めている。

日笠、花澤、早見はほぼ同時期デビューであるが今まさに彼女らの全盛時代である。

ミュージックレインについては2017年は全く奮っていないのが目立つ。

1.5 際立つ状況

1.5.1 M.A.O

4年前の調査では調査対象外だった M.A.O が 4 位。絶賛売出中の様相を呈している。傾向的には一時の戸松遥や中原麻衣に似ている状況ではある。しかし声を聞いても誰だか分らない『ステルス声優』というのが今後どう転ぶか未知数。

1.5.2 水瀬いのり

4年前まで無名だった彼女が破竹の勢いで急上昇。そこにキングレコードが目を付けてさらに歌手活動も始めて相乗効果により上昇。同じキングレコードの小倉唯よりも声幅はあるので当面は安泰かと考える。

1.5.3 小松未可子

キングレコードから戦力外通告されて 1 年余り。仕事が減るかと思いきや逆に大幅に増加している。逆にキングレコードの足枷が外れたと考えるのが妥当か。

1.5.4 上坂すみれ

前回 4 年前の調査では 51 位と低位だったが今回は 20 位以内に。中身を分析するとキングレコードの恩恵とサブカル的な人気によるところが大きいと推察している。

1.5.5 種崎敦美

前回、調査圏外だったものが 21 位と大躍進。声幅、演技ともにあるとともにドル売りされていないので今後が期待できる。

1.6 気になる動き

1. 加隈亜衣

前回、圏外だったのが 12 位と大躍進。着々と足場を固めている様子が窺える。

2. ラブライブ勢

μ's、Aqours を含むラブライブ勢が軒並低空飛行をしている中、ラブライブ勢としては三森すず子、久保ユリカの 2 人が健闘している。三森に関してはブシロードという強力なバックアップによるところが大きいと考えるが久保に関しては後ろ盾が無いものの多様な声質と演技力でカバーしていると考えられる。Aqours に関しては低位に位置している。ラブライブ終了と同時に終了してしまいそうである。

2. 沢城みゆき

現在の集計方式になってから 8 年程度経過するが常に上位に入っている。ここ暫くは主役級は無いものの何かにつけて出演している。

1.7 定点観測

1. 能登麻美子 (19 位→ 3 位)

前回調査より大幅上昇。序々にベテランの風格が出てきている。

2. 堀江由衣 (7位→43位)

前回、7位と上位であったが今回は大幅に下落。確実に世代交代が行なわれているものと推察。

3. 田村ゆかり (48位→56位)

前回調査同様に低位で推移している。昨今の様子を見ているとメンタル面での不調が見えるので今後の動向がかなり懸念される。

4. 平野綾 (90位→212位)

テレビアニメへの出演数は0。完全に声優界から足を洗いつつある。10年前に飛ぶ鳥を落とす勢いだったものの方向性を誤ったことにより最早絶望的。

5. スフィア (高垣彩陽、豊崎愛生、戸松遥、寿美菜子)

最上位は高垣彩陽の32位と低空飛行が続いている。前回調査でも概ね低空飛行だったことを考えると活動休止の影響は関係ないかと思えるが今後の動向が危ぶまれる。

7. 野水伊織 (112位→159位)

プロダクション・エースの中の主砲であるが、前回調査より順位を落している。前回予想した通りプロダクション・エース全体的に大幅下落している。

2 TCVV が見てきた 20 年

TCVV 議長

1. はじめに

声ヲタとして見てきたこの 20 年間で時系列を行ったりきたりしながら徒然なるまま語ってみたい。

2. 第 4 次声優ブーム初期

第 4 次声優ブーム初期、国府田マリ子、椎名へきる、宮村優子らが活躍。唄って踊れるメディアにもちよくちよく出ていた。

特に宮村優子は新世紀エヴァンゲリオンのアスカの CV で有名になったが、当時から突飛な存在で写真集を出したりサブカル的な CD やアルバム、テレビ出演などして当時、アニタレとして最先端だった。演技力だけでは昨今差別化できないので少しでも差別化しようと特技のようなものを付ける。我々はそれを先鋭化と呼んでいるがそれくらい当時の宮村優子は声優としては先鋭化していた。

今ではあまり表に出ないが今の基礎を作ったと言っても良い。先鋭化と言えば上坂すみれ。ロシア属性且つサブカル的な側面を打ち出し差別化をはかっているようだが彼女がデビューした頃に思った感想は宮村優子の亜流もしくは二番煎じにだなと感じたくらいである。

また、国府田マリ子は 1998 年に映画に出演した。当時、人気声優が映画に出るなんて考えられず声ヲタの中では話題になった。まあ、映画の内容については酷評されたが...

そして TCVV が設立されたのもこの頃だった。

2. アイドル声優の出現

90 年代後半から、さらに田村ゆかり、堀江由衣など出現によりアイドル声優というジャンルが確立され声優がさらにビジュアルに出て来た。秋元康が 80 年代後半作った身近なアイドル路線を継承する形で声優のアイドル化が急速に進んだ。

3. 無批判な声優雑誌の登場

アイドル声優の出現と時を同じくして声優雑誌も相次いで創刊された。

が、演技力を評するものは皆無に等しくグラビアや CD の宣伝など提灯記事ばかり。

容姿とか見栄えが良ければ無批判に掲載し、演技下手でもかわいければいいという風潮を作った戦犯ではないかと思う。

4. ラムズの台頭と崩壊

1999年、野川さくらの登場をきっかけにラムズが新興勢力として台頭してきた。

「デビューしなくちゃ始まらない」とのキャッチコピーで新宿の一等地に事務所をかまえ（更にサテライトスタジオも持っていた）多くの所属声優、研修生を集め最盛期には7億円余りを売り上げ、一時期は南條愛乃も所属していた。そーいえば、声優バスツアーを盛んにやっていたのもラムズだった。この様子は2005年末に浅野真澄が冗談半分やっかみ半分で言った「ラムズがこれ以上、大きくなりませんように」（通称ますみんの呪い）からも分かる。しかし、この言葉がまさか8年後に発動するとは誰も想像できなかった。

2013年3月31日ラムズ倒産。CDやDVDの売り上げ激減により新宿の事務所を撤去する方向であったが改造しまくった事務所の原状回復費用が捻出出来ずに倒産。（負債額2億6000万円）

ラムズ所属声優は歩合制ではなく固定給だった。これはブレイクした時に関連商品化を容易にするための戦略であった。しかし、これにより経費が増大したのだろう。

ちなみに社長の鹿志村は倒産した同年、別の事務所を立ち上げている。何とも商魂たくましい。

2013年に倒産しているが、その傾向は既にあったようだ。ラムズはクローバーという声優ユニットを2005年を立ち上げた。それと同時にファンクラブも出来た。当初年四回の会報を出すはずだったらしいが一度も発行されずにユニット自体も空中分解した。当時から色々手が回っていなかったようだ。ラムズは倒産すべくして倒産したのかも知れない。

5. 深夜アニメの拡大

2000年代前半、独立UHF局を中心に深夜アニメが数多く放送されるようになった。

それまでにもテレビ東京で深夜帯での放送があったが、この時を境に爆発的に増えた。今では毎日どこかしらのチャンネルで深夜アニメが放送されているが少し前までは考えられなかった。

この深夜アニメの拡大は声優人口を増やす要因にもなった。それとともに希望者も増えて来たと思う。

6. エロゲ声優の技能の向上

TCVV設立当初、ゑろゲ声優も酷い有様だった。我々は似非声優の粗製濫造の元凶とまで考えていた。しかし、ゑろゲファンの厳しい耳により淘汰されホントに能力のある声優しか残存することがなくなり今では表に出る声優より上手い状況でもある。

その結果、ゑろゲからデビュー後、能力が認められ表でも活躍するようになった。寧ろ、その方が基礎的な演技力があるので我々としても安心できる。これからも、どんどん来て欲しいと思う。

7. 電機系の本業回帰とキング支配体制

パイオニア、東芝とも元々は子会社に映像製作会社^{*6}を持っていたが長引く不況の煽りを受け本業以外の部門は別会社に譲渡することになった。譲渡前までは、大手筋はキングレコード、パイオニアLDC、東芝エンタテインメント、ピクタエンターテインメントなど豊富にあり良い意味で牽制し合っていたと思う。特にパイオニアLDCや東芝エンタテインメントは皮肉の効いた作品を多く出していた。しかし、譲渡後はジェネオ

^{*6} パイオニアLDCは電通（ジェンネオン）へ、東芝エンタテインメント株式会社は博報堂（ショウゲート）へそれぞれ売却された

ン (現在の NBC ユニバーサル) もショウゲートもあまりアニメに積極的ではないことからキングレコードの暴走が始まった。

8. 声優総取り替えという悲劇

そして『おとぼく事件』が発生した。これは絶対に忘れてはならない事件である。『Remember おとぼく』。むしろ『処女はお姉さまに恋してる』がアニメ化された際、

あろうことか、配給側のキングレコードは自社声優を使っただけの売り込みに躍起になって声優を原作から総取り替えしてしまった。しかも、中心メンバーが当時売り出し中の *Aice*⁵ だったものだから大騒動になった。原作シナリオライターもゲーム会社の経営側に猛抗議をしたがテレビアニメ化および有名声優の起用で脳内お花畑で聞く耳持たず。遂に原作シナリオライターは悔しさを綴った blog をブチ上げて炎上。原作ファンはアニメ化の喜びから一転してお通夜状態で目も当てられない状態となってしまった。原作を大事にする制作会社だったらこんなことはしないだろう。

そー言えば実写版ネギま!もこの頃だったな。(遠い目) まぢでキングレコードはロクなことしねー
この頃のキングレコードには不信感しか持たなかった。

声優総取り替えと言えばアイドルマスター XENOGLOSSIA。当時の人気声優をふんだんに使い内容も全くの別物になってしまい酷い有様だった。人気声優を使えばアニオタや声ヲタが喜ぶと思われていたらナメられたもんですわ。

9. ユニット隆盛 (声優ユニット考)

2005 年頃から声優ユニットがポツリポツリと結成され今では何がどれだけあるのか分からない位に増えた。世の中にある声優ユニットは概ね以下のように分類される。

- 事務所主導型
- 作品付随型
- 勝手連型

まず事務所主導型は声優事務所が所属する声優を戦略的にユニット結成させるものである。事務所主導型はごく一部を除いて全て失敗したと言っていい。事務所主導によるユニットは成功しないと歴史が証明している。(LISP やクローバー、DROPS が有名) そのごく一部の成功例はスフィア*⁷だと思うが、意外と健闘しているのがミルキーホームズだと思う。これはバックにブシロードがいるので強いと考える。資金力があるので何とでもなってしまう。ミューレほどではないが組織力がある。また事務方もそれなりに人が割けるだろう。

いずれにせよ事務所主導で成功するのは資金と組織があるところ。チカラは金である。資金力や組織がないと駄目だ。ただ、なまじ金があるとユニットが飼育される可能性もあるし、実際にその傾向にあるかと思う。

次の作品付随型だが最近実に近い。そして旨味が多いのもこの形だ。作品が終わればユニットに責任を保つ必要がない。ダラダラと長く続けない分、ライブとかで盛り上がりやすい。さらに製作委員会制であれば資金負担が1社に集中しないので財布に優しい等、良いところづくめ。

昨今のアイドル志望の人間や声優志望の人間を集めて作品付随型で安易にユニット化する風潮があると思う。

*7 前回、声優システム論 10 参照

すごく雑な感じで声優デビューさせている気がする。今や声優過当競争の時代。新人声優単品では勝てないのはTCVV短観を見ても分かる。^{*8}しかし、作品が亡き後には何も残らず声優が育つ環境はない。実際、あれだけ盛り上がりを見せたμ'sのその後は悲惨な状態ではないか？

最後の勝手連型はその名の通り声優たちが勝手に作って勝手に消えて行くタイプである。

公式だったり非公式だったり実態が全く不明である。

Aice⁵は堀江由衣による勝手連的なユニットだったが、その後キングレコードから正式デビューとなった稀な例ではある。それによって「おとぼく騒動」を誘発したが...

10. 声優アワードの失望感

2006年に声優アワード設立が宣言された。日頃から作品を陰で支えている声優が顕彰されることに対して我々としては大いに喜んだ。しかし、イザ、フタをあけてみたら新人とは言えないハズの平野綾の新人賞受賞。協賛している声優専門学校卒業生の受賞など不可解な事柄の連続で失望した。

二年目以降もそんな体たらく振りで遂に5回目にして男性声優新人賞は受賞者なし。で、その理由が「調整が付きませんでした」というトンでも無い事態が起った。調整って何だよ。まるで出来レースではないか。流石に主催者側もまづいと思ったのだろう、対策を考え翌年には新体制で望んだが時既に遅し。今では誰も期待せず3月の年中行事の一部ぐらいにしか思われていない。

11. スフィアストーカ騒動

それは2011年に起きた。行き過ぎたファンによるストーカ騒動が発生。『週間ミュージックレイン』というページで逐一報告がなされた。当の事務所であるミュージックレインは火消しに躍起なりスフィア各メンバーも一斉に声明を発表した。この騒動は各方面に衝撃を与えたと同時に声優、特にアイドル売り(ドル売り)している声優も一般のアイドルと同じリスクがあることを改めて教えられたと同時にドル売りの是非についても考えさせられた事件であった。

12. 声優は金持ちにしかねないし持続しない

声優になるためには声優事務所が運営する研修所の研修生になるか専門学校の声優科に通うのが一般的である。そのためには資金が必要である。鉄は熱いウチに打てて言わんばかりに中等教育期間中(中学、高校)に通うのも珍しくない。しかし、この段階で通えるのは、かなり裕福な家庭である。しかも、地方よりも東京の方が良いと地方からわざわざ東京に通う人もいる状況だ。そうなる交通費もバカにならない。その点でも裕福でなければならない。

ここまで増えた声優ではあるが本業で喰えるのは300人程度と言われている。なので運良く声優事務所に所属できたとしても生活できるのは稀と考えてよい。家庭が裕福であれば、その間に援助もしてもらえるが裕福でなければ非常に辛い。声優は金持ちの道楽と揶揄されがち外れてはいないと思う。そして後から後から若い世代が入ってくるので増えます競争が激化し結果、廃業という憂き目に合ってしまう。

^{*8} 上位10位にアイドル的要素はほぼ無い。

13. 事務所と作品に強く依存

ラムズのところでも述べたがかつて勢いのあった人間でさえも一気に人気急落する。一度作品が当ればミュージックレインは強い。そういう意味では資金力のある響も

14. 終わりに-声優はブラックボックスでかまわない-

俳優が声優をやって大失敗する例は枚挙にいとまがない。優れた俳優が優れた声優とは限らない。ドラマでは演技に定評のあるキムタクだが彼が出演したアレは酷かった。声優とは非常に演技力を必要とすることが逆に改めて認識できたかと。また『声優に挑戦』という見出しも不快である。大切な作品に挑戦とか言うな。100%の品質で出せ。試作品を製品として売り出すようなものだ。俳優でさえ難しい声優をアイドルがするなんて以ての他だ。話題性なんて要らない。まちで人間は万死に値する。

この20年で声優の演技レベルは格段と向上したと思う。熾烈な競争の影響もあったと思う。結果的にアイドル声優というのは淘汰されてしまっている。しかし、残念なことにこの状況下でも若干ながら『棒声優』がいることだ。これだけレベルが上っているのに何故なのか？

3 声優システム論 11(声優を取り巻く状況)

TCVV 議長

声優システム論とは

現代声優はアニメや洋画に声を当てるだけの存在ではなく社会や経済にも影響を与える存在になり、その動きは一昔前の古典的な声優観では説明出来無い。

そこで現代声優の振舞いを複雑系として捉えることを考え、この系を『声優システム』と名付けた。^{*9}
本論は『声優システム』を様々な角度から考察するものである。

1. はじめに

今回の声優システム論はアイドル声優の構造を再度考えてみたい。(アイドル声優の構造的問題)

2 声優とて所詮芸能人である

声優とは役者である。

そんなこと言われなくても百も承知と言われそうだけど声優を理解する上で『役者』という性状を理解しなくてはならない。

声優を含む役者は基本的に自己顕示欲が一般人よりも強い。でなければ役者になんかならない。人前で演技をするというのはそう言うことである。

特にポニキャンやキングレコードから CD を出している声優は自己顕示欲が強い傾向がある。メディアへの露出が多くなれば断然有利であり、その提案に自ら乗って行くのは自然の道理。

上坂すみれを例にしよう。

昨今、彼女は twitter でキモヲタにからまれるのを嫌がって更新をやめた。しかし、その割には毎回毎回きわどい写真をブログ等にアップしている。一見矛盾してるように見えるけど、役者は自己顕示欲の塊と思えば納得も行くだろう。

上坂ほどではないが、多かれ少なかれ役者と言うのは自己アピールが必要不可欠なのだ。

上坂も被害者ぶるのは、ちょっと違うのではないかと思う。声優と俳優は違うとの認識だろうが、基本的は同じと考えるべき。役者としての覚悟みたいなものが足りないと思う。さらにアイドルだから守られるべきと言うのは甚だ傲慢だ。何様のつもりだ。

これは上坂に限ったことではない。昨今は勘違い声優が多過ぎだ。絡まれて上等ぐらいの気概は持って欲しい。

^{*9} システムたる典型的な例は声優のためにアニメが作られるようになったこと。主従で言えば、従だった声優が主になったという点から見ても『システム』要件を満たしている。

3. 役者に倫理観とか求め過ぎ

声優として所詮芸能人である。生き馬の目を抜く芸能の世界に生きている彼等にとって少しでも有利なスキがあれば入りこむのは道理だ。そんななので一般人の倫理観なんて関係ないと思った方が良い。(日々生きるか死ぬかの争いだ)

しかし、受ける側はイメージ戦略によりそんな場面は見えてこない。メディアに出る声優なんて友人でもなければ恋人でもないのが普通だ彼らの性格なんて知る由もない。売る側が作った可愛いくて清純なイメージなんて所詮幻想。作られたイメージを受ける側が勝手に解釈しているだけだ。

このように双方の考え方の行き違いが後々悲劇を生むことになる。

4. 優良誤認表示は駄目でしょ

そうは言っても受ける側の立場は弱い。

イヤなら買わなければいいというのは適切な情報開示があってこそだと思う。

役者だって人間である、恋愛もすば結婚もする。そんなの当たり前だ。しかし、売る側がアイドル路線で「彼氏いません」と言ってこの樂園が永遠に続くように喧伝しておいて、舌の根も乾かぬうちに「入籍しました。」と来れば、結婚、恋愛を勝手しやがってと受けとめる。これも当然である。そらあ、発狂するわな。騙し騙され合いを楽しむ特殊な性癖の人間なら別だが...

優良誤認表示するような売り方は最早詐欺に近い。つか、もう詐欺だ。

声優が結婚する度に悲しい思いをしている人のブログや感想を見る度に複雑な思いがする。

悲しいかな受ける側は供給側より与えられたコンテンツを甘んじて受けるしかない。馬鹿みたいに騒ぐ他ない。特に昨今のユニットブームに乗ったライブで騒ぐ他ない策略にまんまと乗せられている。

で、何が言いたいかと言えばアイドル声優にのめり込み過ぎんなど言うことだ。

厳しい芸事の道で行きているんだから根性が悪いと思っていないぐらいの感覚でいないと後でダメージを受ける。

5. アイドルの脆弱性

価値が無いと判断すれば

我々の思想は演技さえしっかりしてくれば何でも良い訳だが、そんな中でもただ納得行かないの点はある。

事務所サイドは声優をアイドル売り(ドル売り)しておきながらイザ何かが起こると、その事を忘れたのかの如く振る舞う。前回、スフィア特論でも述べたがストーカー騒動が発生した際

しかも、スフィアメンバーは自分たちは役者であるとアイドルではない的な声明を発表したが、ミューレ側は明らかにドル売りしているミューレ側の

6. 声優の人気寿命

しかもアイドル声優も永遠には続かない。岩田光央氏は『声優道』にて女性声優の旬の期間は5年と語っている。筆者らの長年の研究から概ね6年と見ている。まあ、6年だとしても5年だとしてもビジネスモデル的には短期決戦集中型である。売れているうちに短期集中決戦で売り逃げてしまって一瞬の輝きを求めるだけというやり方である。そうなれば事務所側も本人も必死になるのも当然のことである。

TCVV 短観を見て頂ければ分かるがアイドルアニメに出ている声優(役者)はことごとく奮っていない。メディアにバンバン出ている人でさえ、短観の上位に来るのは難しい。秋元康が計画している例のアニメに出演する声優のお先が知れる。恐らくは一発屋に近いだろうと踏んでいる。そう言うでも声に特徴があるもしくは演技が上手い人間しか残れないのは間違いないだろう。

本来であれば売れている間に10年後を見据えることが出来れば中堅、ベテランへの道も拓けるとは思うけど、理想論であり実態は忙しい上に脳内お花畑状態なので考えられないのだろうと思う。

7. 田村ゆかりが成りたつ理由

そもそも田村ゆかりが今現在成り立っているのは以前、本論でも述べたように田村ゆかりがドル売りされていても残っているのは声の種類があることと、軍隊並みに恐ろしい統率力を持っている王国民という強力ファンの下支えがあってこそ。毎年毎年、次々と市場に供給しているが、数年もすれば次の人間に移ってしまう声ヲタ様をつなぎとめておくのは至難の業である。ある程度ファンがいればCDなどのグッズの類を購入する数も確保できるのでアイドル業も維持できる。

選挙に当選するには三バンが必要と言われている。この三バンとはジバン(地盤)、カンバン(看板)、カバン(鞆)である。アイドル声優として活動し続けるには同様に三バンが必要と考える。地盤とは支持者を持つ地区つまりファンそのもの。

看板は知名度や能力と行ったアピールポイント。

鞆は資金の沢山入った袋である。

8. 小倉唯は田村ゆかりポジションになり得るか？

よく小倉唯は田村ゆかりの代替声優という話を聞く。それではポジションに取って変わるのかと言えば恐らくはNOである。堀江由衣的なポジションならあり得るが三バンがないウチは田村ゆかりの後継は恐らく無理。同様の理由で竹達は残らないと見ている。竹達には今のところ強力なファンがいない上に声幅も少なく根本には引きつける何かがあるとは思えないからだ。

9. 資金があればアイドル声優は続けられるのか

ここで気になることがある。

アイドル声優を続けるには資金が重要だと述べたが潤沢な資金があれば続けられるのかということについてだ。その格好のサンプルがあった。ミュージックレインや響に所属している声優だ。既に述べて来たようにバックについている企業は潤沢な資金を持っている。ウォッチ対象として様々なデータが得られそうである。

10. 今回のまとめ。

- 声優は性格が悪くてもそれが普通
- 声優の人気は概ね6年
- 一瞬の輝きを求めるだけという覚悟が必要
- アイドル声優を続けるには地盤、看板、鞆が必要

4 Chairman's free talk SPECIAL -議長放談-

TCVV 議長

1. 小松未可子という特異な存在

小松未可子について言及しておきたい。

彼女は元々声優ではなかった。事務所も声優事務所ではなく一般の芸能事務所(ヒラタオフィス) 彼女はキングによって見い出されキング声優として約4年活動してきたが、キングの政策転換により半ば追放される形で契約終了となった。本人も寝耳に水だったらしいのでキングのドライさが伺い知れる。これは20年見た中で異例と言える。我々から見たら使い捨てのように見えるのだ。

2. 期待外れの文春砲にガッカリ

前回本誌で自浄能力の無くなった声優界に『毒をもって毒を制して欲しい』と文春砲の一撃を期待する旨を述べました。

しかし、蓋を開けたら殆ど文字通りの外れな記事ばかりでガッカリ。どのくらいガッカリしたかと喩えれば第1回声優アワードでその結果を知った時ぐらいのガッカリ感。放った文春砲のダメージなんてこれっぽっちもない。

3. 声優事務所を旧財閥に喩えるなら

前回本誌にてミュージックレインについて語りました。何か問題が起きれば全力をもって叩き潰す組織力は『組織の三菱』並と評しました。大沢事務所、実力派ばかり備え磐石な体制をしている姿は、まさに『人の三井』を彷彿させる。では三大財閥の『結束の住友』はどこか。まだ見極められていませんがバオバブから集団離脱した人間で構成された『アクセルワン』あたりか。どう思いますか？

4. アイドル系作品多くないですか？

最近、重厚なストーリーの作品が減ってきたと感じます。萌え系、異世界チートモノもしくはアイドル系ばかり。ライブで暴れたい人にとっては天国でしょうが声優の成長を妨げているし、重厚なストーリーを楽しみたい側にとってもあまり好ましい状況とは思えません。

5.M・A・Oの声優アワード受賞の可能性

破竹の勢いで出演数を稼いでいるM・A・O。声優アワード受賞も標的範囲内ではあると考えるが声優アワードの規定である『印象に残った』というところを鑑みると彼女の特技と言えるステルス性能により受賞は難しいのではないかと考えます。

6. 林原めぐみの処遇

小松未可子のところでも述べましたがキングが戦力外通告を受けてここ数年はアニメに殆ど出ていないキングにとっての功労者なので暫く

7. 若槻千夏とか言う人、何なの？

今月になり若槻千夏という人が声優になりたいと言い出してアニヲタ、声ヲタを始め各方面から叩かれています。報道ではボイストレーニングを始めたとか。当方は全く彼女のこと知らないのですが仮に声優になったとしても棒演技やゴリ押しで作品に悪影響さえ与えなければそれでいいです。

8. ランク制について

声優は経験を重ねると基本給が上って行くランク制が敷いている所が多いのです。年功序列的な意味では良いのですが、これが非常にクセ者で今はこれが悪用されていると考えます。ある程度経験や年齢が上昇すると急激に単金が上昇し使いにくくなります。すると、ランクの低い若い人の方に仕事が行ってしまいます。この事がベテラン不在の遠因とも言われています。ミュージックレインや響はどのような仕組みになっているのか非常に気になるとことです。

9. ノブナガン

随分前に放送されたアニメ、ノブナガン。あのヒロインはどんな基準であの声優になったんでしょうか？アニメ1話を観て、また素人を連れて来たのかよと怒りまくって放送後に調べたら声優で驚きました。あんなサプライズは要らないので普通に作品を作って頂きたい。

編集後記

本誌をご高覧頂きありがとうございます。

当サークルは今年で設立 20 周年を迎えます。声優は演技が基本という姿勢を貫き圧力団体として活動しています。

我々のような弱小サークルがここまで続けて来れたのも期待や会場での激励があったことです。掛け値なしに厚く御礼を申し上げます。

声優は演技力が重要だと訴え続けて 20 年。今夏放送されたアニメ「ナナマルサンバツ」。幸か不幸か演技力や技術が大変重要なことを再認識させられました。ヒロイン役は声優ではなく川島海荷というアイドルみたいな人。

上手ければ何の問題もなかったけど大方の予想通り大変な棒声優でした。

棒姫屍姫、電波教師の上に行く棒読み振りで耳障りというレベルを乗り越えて単純に不快。

あの棒読みの所為でストーリーが全く入って来ず観るのが筆舌に尽くし難いくらいに苦痛で途中で断念してしまっています。

ストーリー自体は面白いので、いつか見るとは思いますが何せあの棒演技ですからまた挫折してしまうかも知れません。

声優というものは演技力が非常に重要ということを改めて感じたと共に棒声優は排除しなければならないと強く痛感しました。

本文中でも述べましたがヘタな声優は随分と減りました。これも数のチカラでしょう。母数が増えるということも悪くないかもしれません。「ナナマルサンバツ」のような本業ではない者が役をしなければ早々おかしなことにはならないかと思えます。

TCVV 短観を見て唖然としました。たった 4 年でここまで劇的に変化するものかと。ある意味酷い結果でもあります。僅か 4 年で 80 人余りの新人声優登場。実数は 100 人越えているかと思えます。

中身を見ると人気だけではない実力のある者が残っているという感じがします。

今売り出し中の人気のある人間も上位に入っていることは認めますがそれがいつま続くのかと考えると複雑な感じ です。

今回は時間の関係で入れ替わりの多い女性声優のみの調査しか出来ませんでした。男性声優に関してはまた違った傾向がありそうです。

特別記事にて 20 年間で TCVV 視点で俯瞰しましたが、ホントに色々あったと改めて思いました。ハッキリと言えることはドル売りしている声優は漏れ無く淘汰されてしまうことです。

今残っている人達はいずれもドル売りされていない人達ばかりです。

逆に考えると華々しい活躍をしたいと思う方は数年間の短期決戦で駆け抜けるとう方針で動く必要があるということです。

あと何にしても金がかかる。声優になるにも金がかかる、流行りのユニットを維持するにも金がかかる。特にユニットは資金的に余裕がある事務所しか最早作っては行けないと思います。ユニットで売り出しても後に続かないのが最近の傾向です。例の秋元康謹製ユニットはこれを打破するのか。我々として生暖かい目で見守ってゆきたいと思えます。

では、また次回。

TCVV 白書 第 19 号 通巻 22 号

発行 「声優は Visual に出るな!会議」 情報管理部

組版 L^AT_EX2e (Cloud L^AT_EX)

発行日

2017 年 12 月 30 日 (初版)

連絡先

「声優は Visual に出るな!会議」

代表者 萱沼真一

URI <http://www.tcvv.org/>

E-mail info@tcvv.org

Twitter <http://twitter.com/tcvv>

Copyright (C) 2017 The council of ‘Voice actors should not appear in Visual’

本文に一切変更を加えず、この著作権表示を残す限り、この文章全体のいかなる媒体における複製および配布も許可する。